

寝ても覚めても考えれば 閃ひらめきは宿る

下請けから出発し、医科と歯科における微小手術器具、根管治療器具こんかんの独創的な技術開発で、世界市場に冠たる地位を獲得したマニーの、これまでの刻苦こくく勉励べんれいと革新の意気込みは、我々中小企業にとって「宝の山」である。

**当社には、他人が真似できない
高度なノウハウが蓄積されている
という自覚が足りなかった**

片方マニー株式会社は、医科と歯科の、非常に狭いといえ狭いマーケットで、「オンリーワン企業」として世界トップになりましたが、ここに至るまでには、山あり谷あり、失敗もあったと思いますが、いかがでしょうか。

松谷―私どもは最初、手術用の針を作りました。その針は、糸と別に提供され、看護師さんが針に糸をつけて外科医に渡す「アイド縫合針 (Eyed Needle)」というものです。

私は大学を出たとき、父に「一緒にやれ」と言われ、この仕事を手伝うことになったのですが、当時は、ほとんど外注で作っていました。私が機械を作るようになって量産できるようになりましたが、針はそんなに売れるものではありません。それで、針の次に何をやるかということになって、手術では

切つてから縫う。そうならば、切るためのメスも作ろう、と発想を展開したのです。しかし、それは大失敗でした。かなりの投資をし、三年ぐらいかけて手術用のメスを作る設備を作ったのですがカミソリメーカーも出てきたのです。すでに世の中は、「電気」カミソリが普及し始めていて、カミソリメーカーは危機感をもって、「切るものは何でもやろう」と、メス作りにも進出したところでした。

カミソリメーカーが作ったメスのほうが優れていたので、「止めたほうがいい」となり、三年間という時間と投資が無駄になる覚悟で、撤退しました。

板細工を長年やってきたカミソリメーカーにとって、カミソリからメスを作ることは、刃物が曲線か直線だけの違いです。私どもの針は、素材そのものが板とは違う。我が社には板細工の技術はなく、それを無視したことが敗因だとわかりました。針金を長年扱ってきたにもかかわらず、当社には高度な技術やノウハウがたくさん蓄積されている、という自覚が足り